

## サクラの花を採食したウソ *Pyrrhula pyrrhula* の観察記録

今村知子<sup>1</sup>・齊藤安行<sup>2</sup>・松田幸保<sup>3</sup>・武藤藍子<sup>3</sup>

キーワード：キーワード：ウソ，採食，サクラの花．

### はじめに

ウソ *Pyrrhula pyrrhula* は旧北区に広く分布しており，日本では主に本州中部以北の亜高山の針葉樹林帯から北海道にかけて繁殖し，冬季には標高が低い山地や丘陵地，市街地の公園などに移動する（中村・中村 1995）．ウソは，植物の実，芽や蕾を好んで採食することが知られており（北島 1975），冬季から春季にかけてサクラ *Cerasus spp.* の花芽や蕾を食い荒らして観光上問題になることがある（仁部 1919, 1979; 無記名 1969; 中村・中村 1995）．

また，サクラの花を採食する鳥類としてシジュウカラ *Parus minor*，ヒヨドリ *Hypsipetes amaurotis*，コムクドリ *Agropsar philippensis*，スズメ *Passer montanus*，コイカル *Eophona migratoria*，ドバト *Columba livia*，ホンセイインコ *Psittacula krameri* 等が報告されている（今村・井田 1987; 今村・齊藤 2008, 2012）．しかし国内外を含め，ウソがサクラの花芽や蕾を食べるとの記載はあるが開花した花そのものを採食したという報告はない（仁部 1979; Cramp & Perrins 1994; 中村・中村 1995）．

著者らは，2013年3月から4月にかけて，千葉県柏市において，ウソがサクラの花芽や蕾だけでなく花を採食しているのを観察したので報告する．

### 観察対象と方法

観察した場所は，千葉県柏市布施あけぼの山農業公園内のさくら山である（35° 53′ 52″ N, 140° 0′ 14″ E）．あけぼの山農業公園内のさくら山は，面積が 5.8ha で，約 200 本のソメイヨシノ *Cerasus × yedoensis* ‘Somei-yoshino’ が植栽されている（柏市まちづくり公社 オンライン）他，オオシマザクラ *C. speciosa*，シダレザクラ *C. spachiana* ‘Itosakura’，カンザン *C. Sato-zakura* Group ‘Sekiyama’ などの各品種を確認している．

観察したのは 2013 年 3 月 11 日，22 日，28 日，

31 日，4 月 1 日，4 日～6 日の 8 日間で，観察には 8～10 倍の双眼鏡を用い，ウソの個体数，行動，樹下に落ちている食痕の有無や，サクラの種あるいは品種，花芽や蕾，花の開花状況などを記録するとともに，写真の撮影を行った．また，3 月 28 日には動画を撮影した．

### 結果

観察した 8 日間のうち，ウソがサクラの花芽や蕾，開花した花を採食しているのを観察できたのは，3 月 11 日，3 月 22 日，3 月 28 日，4 月 4 日の 4 日間であった．その際，ウソが樹下に落としたものを観察したところ，花芯の部分がなくなった花芽，あるいは萼筒部分で切り取られた蕾や花であったことから，ウソがいないまたはウソの採食行動が観察されない時でも，これらが散らばるように樹下に落ちている場合はウソの食痕であると判断した．このようなウソの食痕を確認できたのは，4 月 6 日を除いた 7 日間であった．以下に，詳細を記す．

3 月 11 日には，サクラはどの樹も花芽の状態であった．2 羽のウソが，サクラの花芽をもぎ取ると，嘴を小刻みに動かしながら花芽の外側を被う芽鱗を剥くように吐き出した後，またすぐに次の花芽をもぎ取るという動作を繰り返しているのが観察できた（図 1-A, B）．ウソが採食していた樹のほか，何本かの樹の下に新しい食痕が確認できた．樹下の食痕には花芽の中心にある葯の部分がなく，落ちていたのは芽鱗や花弁の部分であった（図 1-C）．どの樹も花芽の状態であったため，ウソが採食していたあるいは樹下に食痕が確認できたサクラの品種を同定することはできなかった．観察された 2 羽は，いずれも喉と頬が赤かったことから（図 1-A, B），♂であった（清棲 1978；五百澤ほか 2014）．また，2 羽とも胸から腹にかけて赤みがかっており（図 1-A, B），体下面が灰色の亜種ウソ *P. p. griseiventris* とは異なる特徴を持っていた（清棲 1978；五百澤ほか 2014）．さらに，胸から腹にかけて一様な赤色で

1. 〒 302-0034 茨城県取手市戸頭 1634-2-609

2. 〒 270-1145 千葉県我孫子市高野山 234-3 我孫子市鳥の博物館  
現所属：〒 302-0034 茨城県取手市戸頭 1634-2-609

3. 〒 270-1145 千葉県我孫子市高野山 234-3 我孫子市鳥の博物館友の会

はないこと、大雨覆の先端が白色ではなく灰色であること、外側尾羽下面の軸斑が明瞭な白色ではないことが(図1-A, B)、ベニバラウソ *P. p. cassinii* の特徴と一致しなかった(清棲 1978; 五百澤ほか 2014)。以上のことから、観察された2羽は亜種アカウソ *P. p. rosacea* であると同定した。

3月22日には、ソメイヨシノは一分咲きであった。2羽のウソがソメイヨシノの花やふくらんだ蕾を採食しており、萼筒の小花柄寄りの部分を嘴で挟んで切り取った後(図2-A)、花を落とし、嘴を小刻みに動かす(図2-B)という動作を繰り返していた。樹には小花柄のみが残っており(図2-A)、樹下には萼筒部分で切り取られた花が落ちていた。2羽のうち1羽は亜種アカウソのみであった。もう1羽は♀であったが、亜種を特定することはできなかった。

3月28日には、ソメイヨシノは三～五分咲き、オオシマザクラは一分咲きであった。3羽のウソが、ソメイヨシノとオオシマザクラで採食していた。ウソは、ソメイヨシノの萼筒の小花柄寄りの部分を横から嘴で挟む(図3-A～C)と同時に噛み切って花を落とし(図3-D)、挟み取った萼筒の内側をしごくように嘴を小刻みに動かしながら萼筒の破片を落とす(図3-E～G)という一連の動作を頻繁に繰り返していた。しばしば嘴は花蜜で光って見え、粘る花蜜で嘴に萼筒の破片や花が付いていることがあった(図3-H)。また嘴に付いた萼筒の破片を取り除くために、時々頭を振ったり、間接頭搔きをしたり、嘴を枝にこすりつけているのが観察できた。ソメイヨシノでは花のみを採食し、蕾を採食することはなかった。樹には小花柄のみが残っており(図3-I)、樹下には萼筒部分で切り取られた花が落ちていた。ソメイヨシノだけでなくオオシマザクラでも採食しているのが観察されたが、花ではなく開花前のふくらんだ蕾を採食していた。ソメイヨシノでは萼筒の小花柄寄りの部分を嘴で挟んでいたが、オオシマザクラでは萼筒の中ほどを横から嘴で挟むと同時に噛み切り(図4-A～D)、蕾をわずかな時間くわえたまま嘴を小刻みに動かした後(図4-E・F)それを捨て、その後もしばらく嘴を小刻みに動かしながら雄しべの花糸と雌しべを吐き出す(図4-G)という動作を頻繁に繰り返していた。樹には、小花柄だけではなく萼筒の一部も残っていた(図4-D)。3羽のうち2羽は亜種アカウソのみであった。残り1羽は♀であったが、亜種を特定することはできなかった。

3月31日には、ソメイヨシノは散り始めて花の中央部が赤くなっており(図5-A)、品種不明のサクラは満開(図5-B)、カンザンは花芽がふくらみかけた状態で(図5-C)、オオシマザクラは一分咲き～満開であった(図5-D)。品種不明のサクラは形状がソメイヨシノに酷似していたが、品種を同定することはできなかった。ウソ5羽を確認することができたが、採食しているところは観察できなかった。ソメイヨシノ数本と品種不明1本の樹下に、ウソが落とすと思われるたくさんの花や蕾を確認することができた(図6-A)。落ちていた花は、いずれも萼筒の小花柄寄りの部分で切り取られており、切り口はまっすぐで、子房はなかった(図6-B, C)。また、カンザンの樹下には、ウソが落とすと思われる蕾が落ちていた(図6-D, E)。オオシマザクラの樹下では、ウソの食痕は確認できなかった。

4月1日には、ソメイヨシノは散り始めて花芯が赤くなっており、品種不明のサクラは満開、カンザンは蕾がふくらみ始めていて、オオシマザクラは五分咲き～満開であった。ウソは声のみで、姿を見ることはできなかった。3月31日と同様、ソメイヨシノと品種不明のサクラの樹下には、ウソが落とすと思われる多数の花が確認できた(図7-A)。カンザンの樹下にも、ウソが落とすと思われる蕾が確認できた(図7-B)。オオシマザクラの樹下では、ウソの食痕は確認できなかった。

4月4日には、ソメイヨシノは満開を過ぎていてかなり散っており、新葉が展開していた。ウソ♀1羽がソメイヨシノの花を採食しているのを観察することができた。ウソは、小花柄寄りの萼筒を横からくわえてちぎり取り、花をくわえて嘴を比較的長く小刻みに動かした後捨てるという行動を繰り返していた。観察していた10分ほどの間に、花を数十個ちぎり取っていた。この時、咲いている花だけではなく、花弁がすべて落ちてしまったものもちぎり取っては花と同じように採食していた。この時の行動は、スズメがサクラの花を採食する方法(今村・井田 1987)に酷似していたが、花をくわえている時間はスズメよりもわずかに長く感じられた。落とした直後の花を拾って観察したところ、切り口はつぶれており、落とした花には子房の一部が残っていた(図8-A)、スズメの食痕(今村・井田 1987)によく似ていた。本個体が採食していた樹の下には、切り口がまっすぐで、子房がない花も落ちていた(図

8-B). 落ちていた花は比較的新鮮だったが、観察中この個体が落としたものではなかった。また、この個体が止まっていた枝には、萼筒から先が切り取られ小花柄だけになった花が多数残っていた。この時観察されたウソの亜種は不明であった。

4月5日には、ソメイヨシノはかなり散っており、オオシマザクラは満開であった。ウソ1羽が上空を鳴きながら通過するのを確認したのみで、採食している個体を観察することはできなかった。ソメイヨシノの樹下には、切り口がまっすぐで、子房がない花が数個落ちていた。オオシマザクラの樹下にも切り口がまっすぐな花が1個落ちており、子房が残っていることが確認できた。

4月6日には、ソメイヨシノは咲き終わりで新葉が展開しており、オオシマザクラはかなり散っていた。ウソは観察できず、サクラの樹下にもウソの食痕を確認することはできなかった。

#### 考察

以上の結果から、本記録はウソが開花したサクラの花を採食した最初の報告である。

サクラが花芽の状態から花が咲き始めた3月22日以降はウソが2-5羽の小群で観察されていたが、サクラの開花が終盤となった4月4日と4月5日には各1羽が観察され樹下には食痕が認められたものの、4月6日には1羽も確認できず樹下に食痕がなかった。これらの観察結果から、おそらくこの頃が本観察地でのウソの渡去した時期であると推測された。

ソメイヨシノの2011年～2020年の平均開花日は、東京では3月26日、銚子では3月31日であるが、2013年は東京では3月16日、銚子では3月21日で、例年にくらべ10日ほど早かった(気象庁ホームページ オンライン)。あけぼの山農業公園さくら山でも3月22日にはソメイヨシノはすでに開花しており、あけぼの山農業公園の利根川をはさんだ対岸の茨城県取手市戸頭でも3月19日にソメイヨシノの開花を確認している(今村 個人的観察)。このことから、ウソがサクラの花芽や蕾ではなく花を採食したのは、2013年のサクラの開花が例年にくらべて早く、ウソが渡去する時期よりも前だったためであると考えられた。

また、花芽や蕾の時期、花の咲き始めから満開を過ぎ散り始めた頃までと花が咲き終わる時期では、

ウソがサクラを採食する方法に違いが見られた。サクラが開花する以前の花芽や蕾の時期は、芽鱗や萼筒を剥くように採食していたが、花の咲き始めから満開を過ぎた頃までは、萼筒の小花柄寄りの部分を真横から切り取って花を落とすと同時に嘴を小刻みに動かして萼筒の内側をしごいた後吐き出すという採食方法であった。花が咲き終わる時期には、萼筒の小花柄よりの部分を同じように切り取ってはいたもののすぐに花を落とすことはせず、萼筒の根元をくわえたまま嘴を小刻みに動かした後捨てていた。これは、スズメがサクラの花蜜を採食する方法に酷似していた(今村・井田 1987)。この時に嘴は花蜜により光って見え、粘る花蜜に食べ終わった萼筒の小片などが付いているのが観察された。また、開花から散り始めまでの間に落とした花あるいは落ちていた花には子房がなかったが、咲き終わりに落とした花には子房が残っているものもあった。ソメイヨシノでは、開花前日から花蜜の分泌が始まり、開花3日後に最高となり、花卉が散った後でも分泌され、分泌された花蜜は子房基部に集まることが知られており(竹内ほか 2005)、オオシマザクラの花蜜の分泌時期も同様であるとする、蕾の時期のオオシマザクラは花蜜を分泌していない可能性が高い。これらのことから、ウソは花芽や蕾の時期には葯や子房部分を食べていたが、開花期以降から花の終わりには子房部分だけでなく花蜜を採食していると推測された。

あけぼの山農業公園さくら山においてウソが花を採食していたのはソメイヨシノ(図5-A)と品種不明のサクラ(図5-B)で、オオシマザクラ(図5-D)では花ではなくふくらみかけた蕾を採食していた。ソメイヨシノは花柄が短く小花柄が2-2.5cm、オオシマザクラは花柄が1.5-2.5cm、小花柄が2-4cm(大場ほか 2007)、萼筒の長さは、ソメイヨシノが7-8mm、オオシマザクラが7-11mmで(大原 2009)、オオシマザクラはソメイヨシノに比べ花序の付け根から萼筒までが長い(図9)。ウソが萼筒基部で花を挟み取ろうとした場合、ソメイヨシノと品種不明のサクラでは子房部分や萼筒の内部に溜まった花蜜を採食することができるが、オオシマザクラでは花序の付け根から萼筒までがソメイヨシノに比べて長く、萼筒基部で花を挟み取っても萼筒内部に溜まった花蜜には届かない(図10)。

以上のことから、ウソが花を採食するサクラの種

および品種には嗜好性があり、その嗜好性は種や品種による開花時期、花柄や小花柄および萼筒など花序の長さの違いによって決まると推察された。

### 謝辞

本稿をまとめるにあたり、我孫子市鳥の博物館研究報告編集委員で我孫子市鳥の博物館学芸員の小田谷嘉弥氏には有益なコメントをいただくとともに大変お世話になった。また同博物館の一名の学芸員には有益なコメントをいただいた。深く感謝申し上げる。

### 引用文献

Cramp S., Perrins C.M. & Brooks D.J. (eds.)

1994. Handbook of the Birds of Europe the Middle East and North Africa The Birds of the Western Palearctic. VIII Crows to Finches. Oxford University Press, Oxford.

今村知子・井田俊明. 1987. サクラの花を採食する鳥類. 応用鳥学集報 7 : 61-64.

今村知子・斉藤安行. 2008. サクラの花を採食するシジュウカラ. URBAN BIRDS 25 : 49-50.

今村知子・斉藤安行. 2012. サクラを採食する鳥類. URBAN BIRDS 29 : 32-33.

五百澤日丸・山形規男・吉野俊幸. 2014. ネイチャーガイド新訂日本の鳥 550 山野の鳥. 文一総合出版, 東京.

柏市まちづくり公社. あけぼの山農業公園, 花と自然. (オンライン) <http://www.akebonoyamanougyoukouen.jp/flower/>, 参照 2021-1-15.

北島信秋. 1975. 蕾を好んで食べる〈ウソ〉. 野鳥の生活. 築地書館, 東京.

気象庁ホームページ. さくらの開花日 (2011-2020年). (オンライン) [https://www.data.jma.go.jp/sakura/data/sakura003\\_06.html](https://www.data.jma.go.jp/sakura/data/sakura003_06.html), 参照 2021-1-15.

清棲幸保. 1978. 増補改訂版日本鳥類大図鑑 I. 講談社, 東京.

中村登流・中村雅彦 (編) 1995. 原色日本野鳥生態図鑑〈陸鳥編〉. 保育社, 大阪.

仁部富之助. 1919. 農作物の鳥害三例. 動物学雑誌 29 : 249.

仁部富之助. 1979. 野の鳥の生態 第1巻. 大修館書店, 東京.

無記名. 1969. ウソとサクラの問題. 私たちの自然 (89) : 2-3.

大場秀章・川崎哲也・田中秀明・木原 浩. 2007. 新日本の桜. 山と溪谷社, 東京.

大原隆明. 2009. サクラハンドブック. 文一総合出版, 東京.

竹内将俊・田村仁人・飯嶋一浩 2005. 桜をめぐる生きものたち. 東京農業大学出版, 東京.

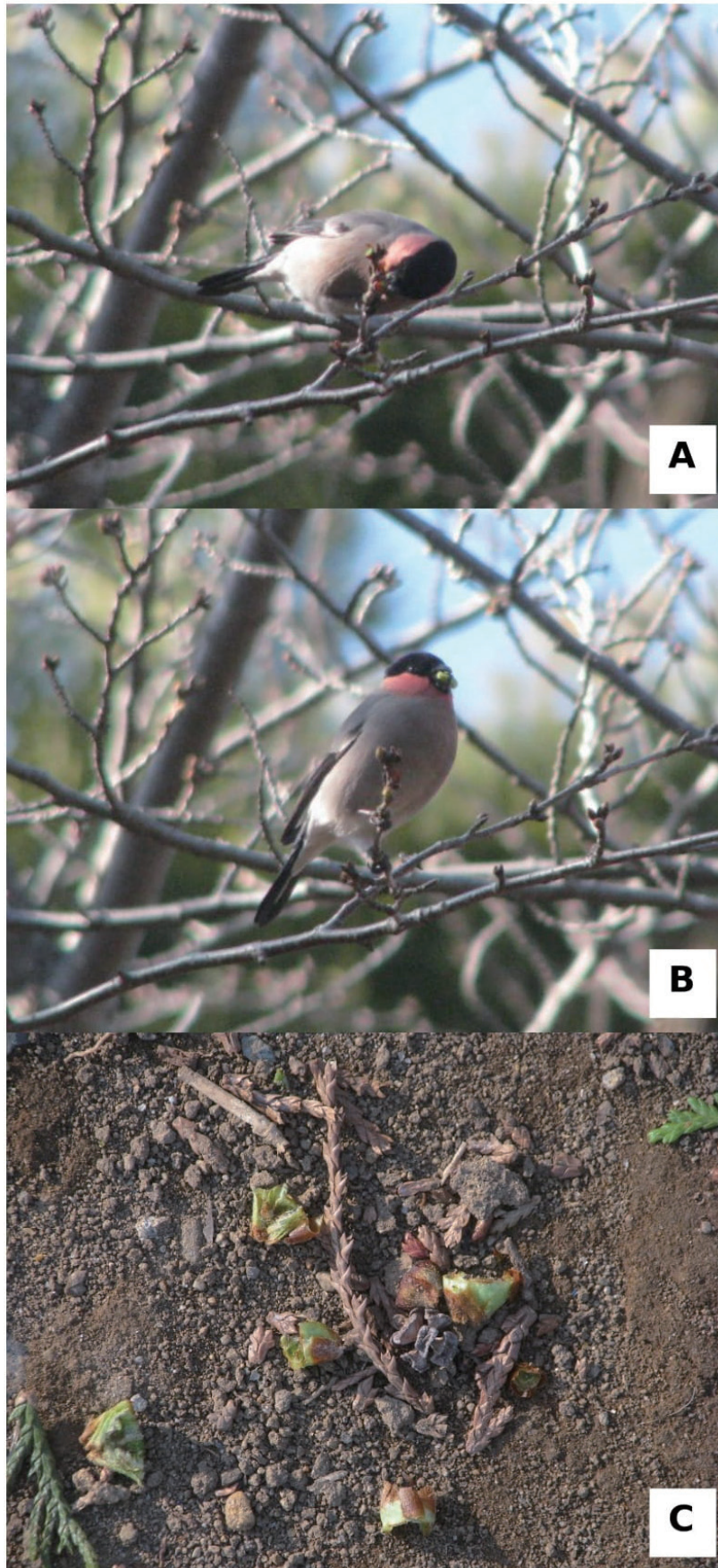


図1 サクラの花芽を採食するウソと樹下に落ちていた食痕 (2013年3月12日 齊藤安行撮影)

A・B: 花芽を採食するウソ

C: 樹下の食痕



図2 ソメイヨシノの花を採食するウソ (2013年3月22日武藤藍子撮影)

A: 花を切り取った直後のウソ

矢印: 萼筒部分で切り取られ、枝に残った小花柄

B: 花を落とした後、嘴を小刻みに動かし萼筒部分を吐き出すウソ

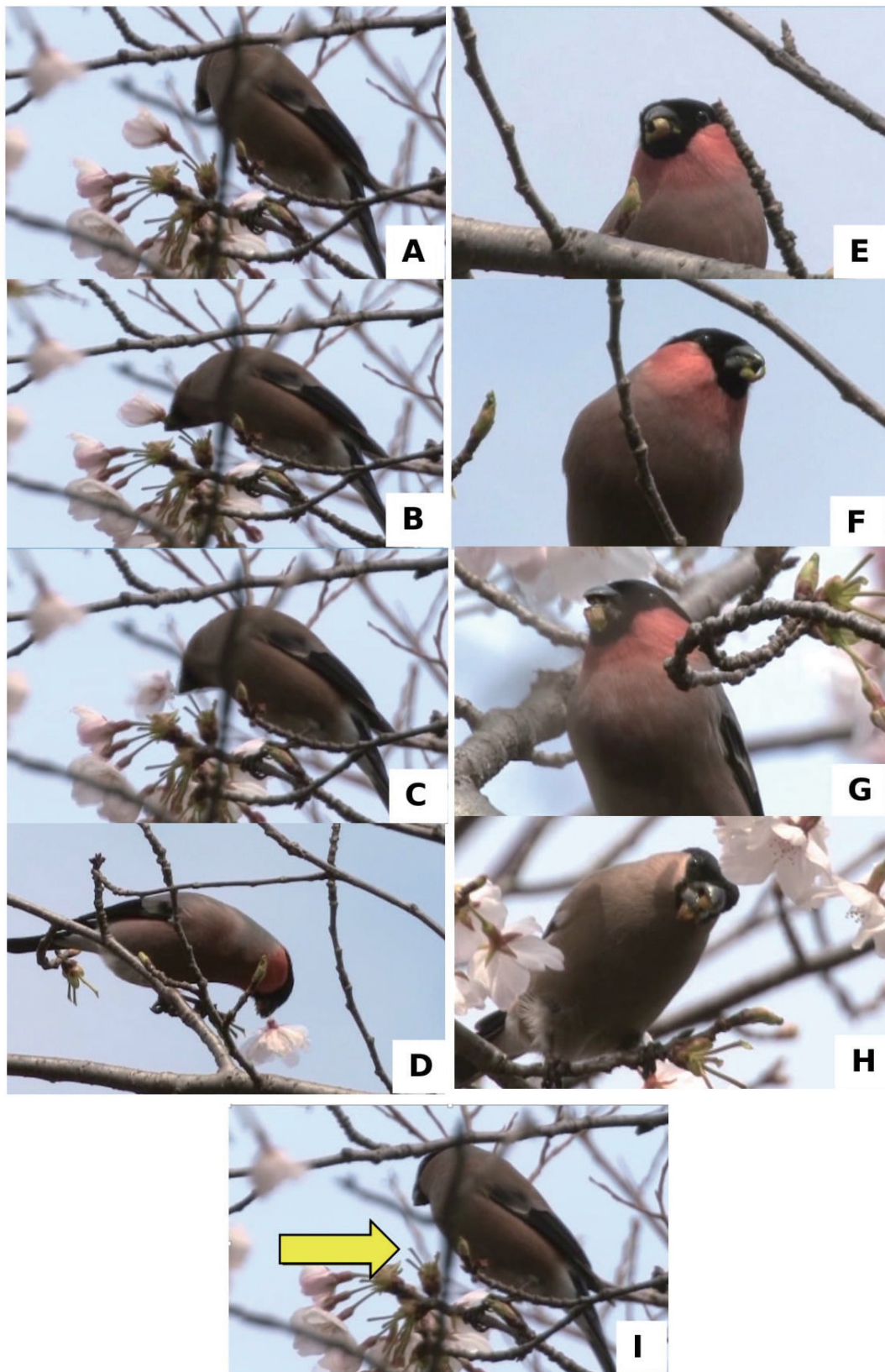


図3 ソメイヨシノの花を採食するウソ (2013年3月28日松田幸保撮影, 動画から画像を切り出す)

A～C: 萼筒部分で花を切り取るウソ

D: 切り取った花を落とす

E～G: 萼筒の内側をしごきながら嘴を小刻みに動かすウソ

H: 花蜜で下嘴に萼筒の小片が付いている

I: 萼筒部分で切り取られ, 枝に残った小花柄

矢印: 枝に残った小花柄

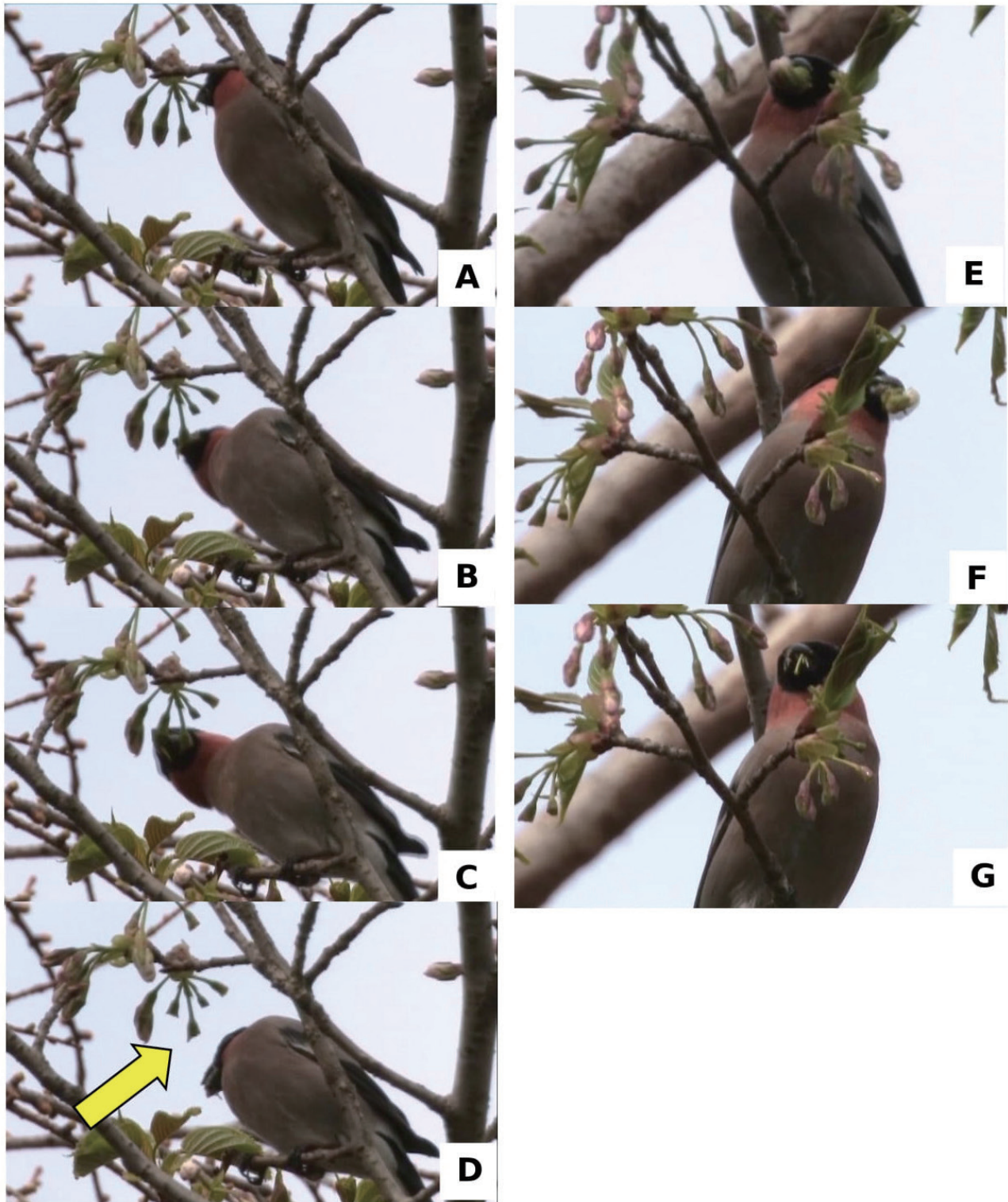


図4 オオシマザクラの蕾を採食するウソ（2013年3月28日松田幸保撮影，動画から画像を切り出す）

A～D：萼筒部分で蕾を切り取ったウソ

矢印：萼筒部分で切り取られ，枝に残った小花柄

E・F：萼筒部分で蕾をくわえ嘴を小刻みに動かす

G：蕾を捨てた後，さらに嘴を小刻みに動かす．嘴から花糸が見えている．





図5 ウソが採食したサクラ各種 (2013年3月31日齊藤安行撮影)

A: ツメヨシノ

B: 品種不明

C: カンザン

D: オオシマザクラ

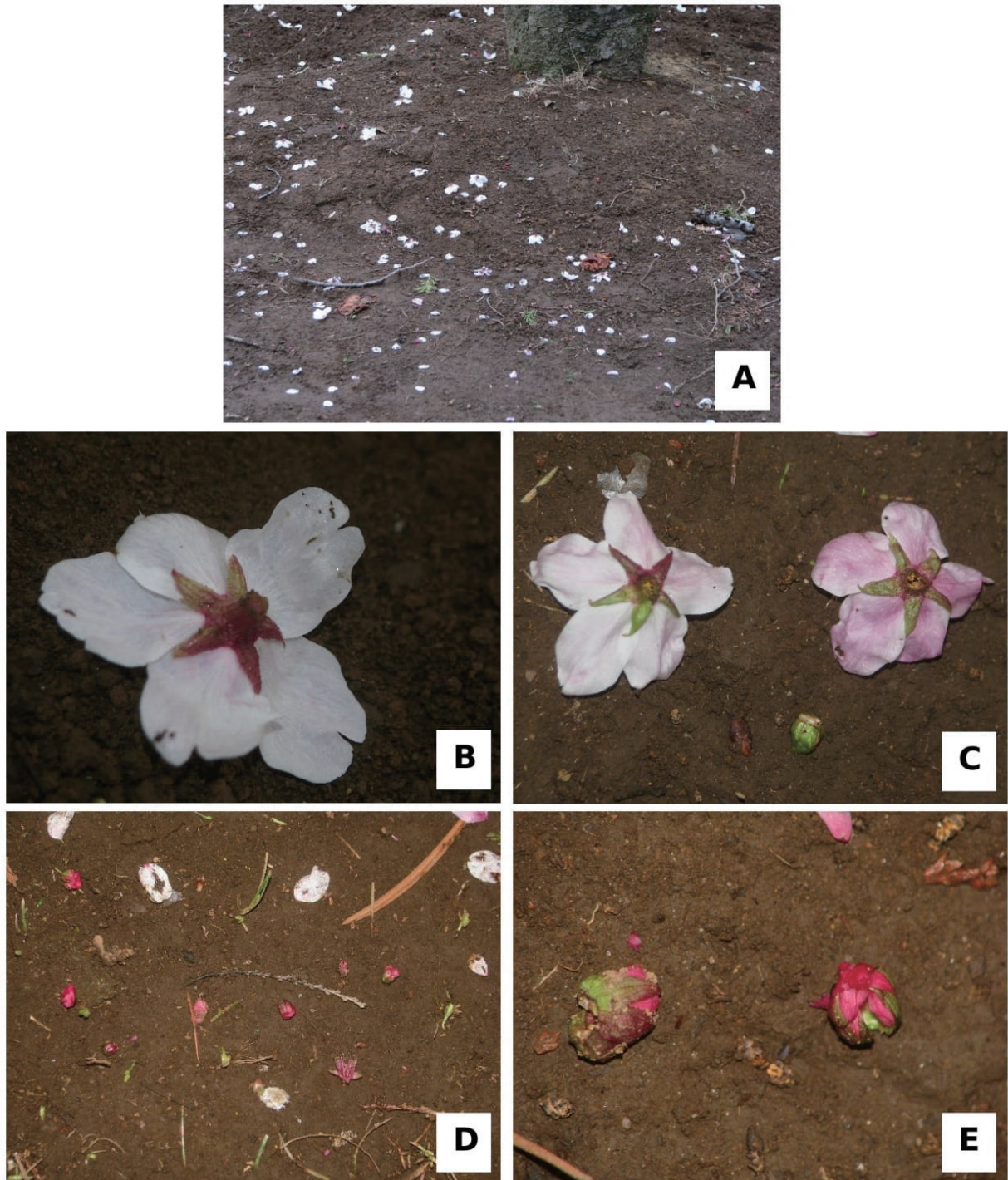


図6 ウソの食痕（2013年3月31日齊藤安行撮影）

- A：樹下に散らばる食痕
- B：ウソが落としたソメイヨシノの花
- C：ウソが落とした品種不明の花
- D・E：ウソが落としたカンザンの蕾

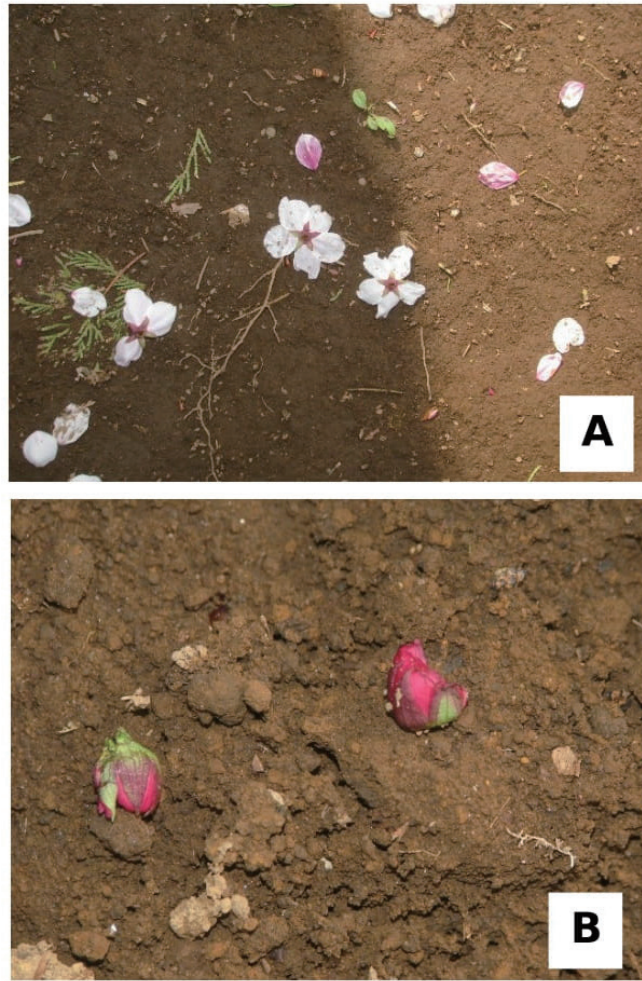


図7 樹下の花 (2013年4月1日齊藤安行撮影)  
A: ウソが落としたソメイヨシノの花  
B: ウソが落としたカンザンの蕾.

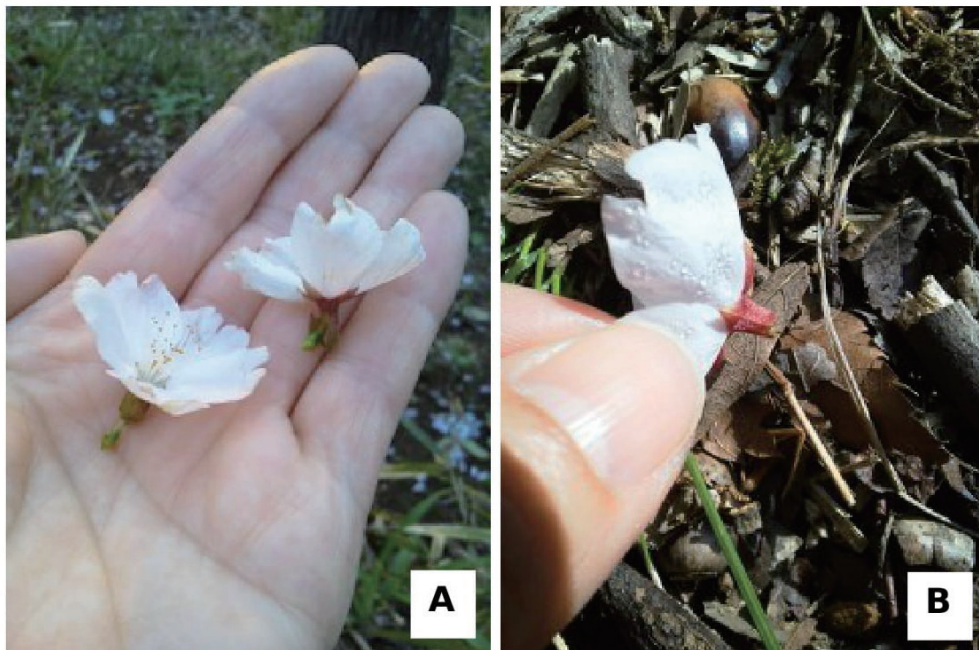


図8 ウソが落としたソメイヨシノの花 (2013年4月4日今村知子撮影)  
A: 切り口がつぶれている花  
B: 切り口がまっすぐな花

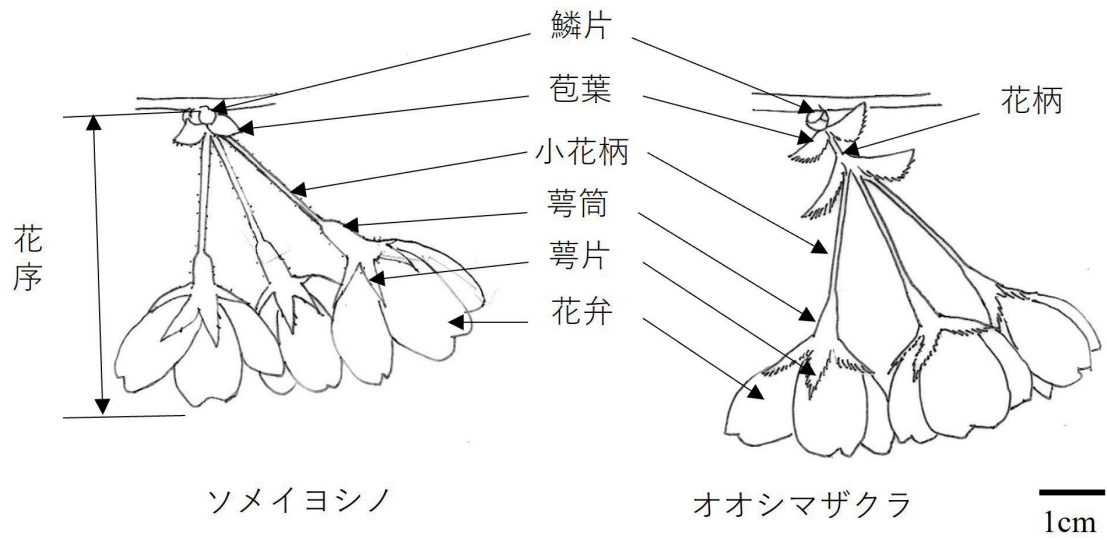


図9 ソメイヨシノとオオシマザクラの花の構造の比較

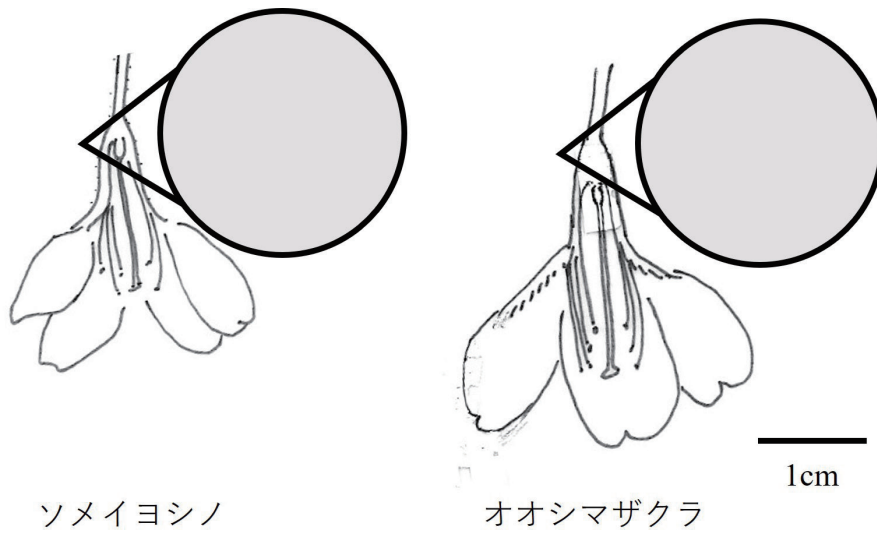


図10 ソメイヨシノとオオシマザクラの花の縦断面  
ウソが萼筒基部を嘴で挟んだ場合のソメイヨシノとオオシマザクラの花の縦断面の比較

An observation record of Common Bullfinch *Pyrrhula pyrrhula* feeding on cherry blossoms

Tomoko Imamura<sup>1</sup>, Yasuyuki Saito<sup>2</sup>, Yukiyasu Matsuda<sup>3</sup> & Aiko Muto<sup>3</sup>

1.Togashira 1634-2-609, Toride, Ibaraki 302-0034, Japan

2.Abiko City Museum of Birds, Konoyama 234-3, Abiko, Chiba 270-1145, Japan

Present address: Togashira 1634-2-609, Toride, Ibaraki 302-0034, Japan

3.Supporting Member of the Abiko City Museum of Birds, Konoyama 234-3, Abiko, Chiba 270-1145, Japan

Key words: Common Bullfinch, *Pyrrhula pyrrhula*, feeding, cherry blossoms.